

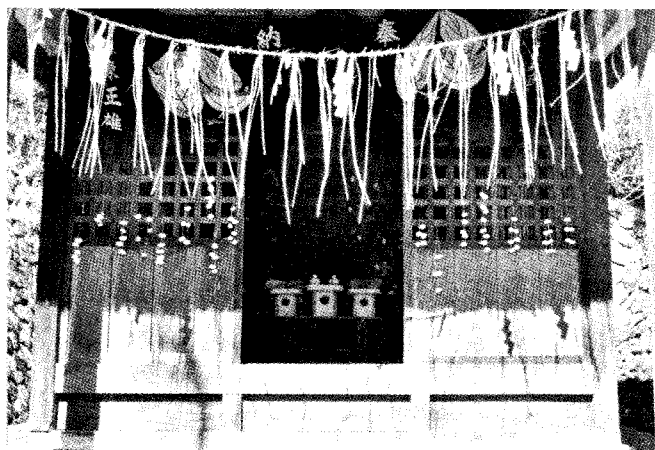
川崎市立 日本民家園

日本民家園だより 43号 平成12年3月31日 編集・発行 川崎市立日本民家園

『蚕影山祠堂のまつり』展示



図版1 「蚕影山祠堂のまつり」復元展示(全景)



図版2 「蚕影山祠堂のまつり」復元展示(格子戸の菰玉)

日本民家園では、平成12(2000)年3月4日～3月14日まで園内の蚕影山祠堂において復元展示「蚕影山祠堂のまつり」を行いました(図版1・2)。この祭りは、毎年3月23日(1)に川崎市麻生区岡上の養蚕講中(1)が行っていたもので、昭和初期まで行われていたものでした。この地域は川崎市の養蚕の中心地でしたが、現在ではその面影もほとんどなくなってしまいました。今回の復元展示を見て、自分達の地元で養蚕が盛んに行われ、それに伴う行事・信仰が広く行われていた事を知ってもらえたのではないかと思います。ただ、今回の展示はあくまでも外見を復元しただけであり、内面としての人々の信仰心や繋がりといったものを感じることは非常に困難であり、かつての祭りの雰囲気とは比べようもありませんでしたが、これからも後世に長く残すべき川崎の文化として大切にしていきたいものです。

そこで、「蚕影山祠堂のまつり」の復元展示を行ったこともあり、蚕影山に関する歴史などをみなさんに少し紹介してみたいと思います。

【川崎における養蚕の歴史】

多摩川に沿って東西に細長い川崎市の北西部にあたる麻生区・多摩区周辺は、旧武蔵国の中でも現在の東京都西部にあたる三多摩地区（旧北多摩郡・旧南多摩郡・旧西多摩郡）とともに養蚕が非常に盛んだった地域です。この地域の養蚕は、江戸時代末の開国に伴う安政5（1859）年の横浜開港により、生糸（絹）が重要な輸出産品となったことで隆盛しました。その後、生糸が日本の主要輸出産品としてその生産量が増大すると、その原料である繭を生産する養蚕も大いに発展していきました。川崎の養蚕は昭和の初期に最盛期を迎えましたが、昭和10年頃からの生糸輸出の減少、生糸価格の下落が起こったことにより養蚕農家の減少が始まり、さらに第2次世界大戦が激しくなると桑畑が食料用の畑などに転用されるなどして養蚕の斜陽化が一層進み、昭和20年前後には川崎市内の養蚕はほとんど見られなくなりました。

【蚕影山祠堂と金色姫物語】

この祠堂は、川崎市麻生区岡上の東光院境内にあったもので、養蚕を行っていた人々の組合的な集まりであった岡上養蚕講中によって建てられました。この祠堂は、宮殿とそれを覆う覆堂からなり、前者は裏側に取り付けられている棟札に記された「文久三年⁽²⁾十月二十三日」に落成したことが明らかになっています。後者の創建は確実には分かりませんが、もう1枚覆堂にあった棟札から推定すると、おおよそ宮殿の落成から数年後のことであったと思われます。

この蚕影山祠堂の見所としては、宮殿のレリーフ状の木彫りです（図版3～6）。これは養蚕の神である金色姫の4度の苦難である「獅子」「鷹」「舟」「庭」という場面を表しています。では、この4場面を理解するために、金色姫の物語について簡単にお話したいと思います。

§ 金色姫物語 §

北インドの旧仲国（なかつくに）の姫であった金色姫は、幼くして母を亡くしました。その後、父である大王が後后を迎えましたが、その継母は金色姫を憎み、様々な苦難に逢わせました。最初姫は獅子が多く住む谷に捨てられましたが、獅子は姫

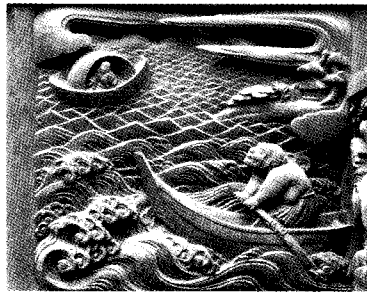


図版3 「獅子」の場面



図版4 「鷹」の場面

を背中に乗せ王宮に送り返してくれました（獅子の場面）。次に鷹の多く住む山に捨てられましたが、父王の鷹狩りにお供していた兵士たちに助けられました（鷹の場面）。継母はますます姫を憎み、小舟に姫を乗せ海眼山という岩ばかりの小島へ流しましたが、通りかかった釣り人によって助けられました（舟の場面）。さらに王宮の庭に生き埋めにされましたが、庭の一部が光輝いているのを見つけた大王がそこを掘らせると、その中から姫が見つかり助かりました（庭の場面）。大王はこのままこの国にいてはまた危険な目に逢わされると考えて、桑の木のくり舟を作らせ、そこに姫を乗せて泣く泣く沖へ押し出しました。そうして流されて漂着した所が日本の常陸国豊浦湊でした。姫はその豊浦の権の太夫夫婦に助けられましたが、まもなく病気で亡くなりました。夫婦は嘆き悲しみましたが、ある夜姫が夢の中に現れ、「私は馬鳴菩薩の化身です。私に食べ物を与えてくれるのなら、後でご恩返しすることができましょう」と告げました。朝になって権の太夫が姫の亡骸を埋めた所を掘り返し、柩を開けてみると姫の亡骸はなくなっており、小さな虫だけがいました。そこで姫



図版5 「舟」の場面



図版6 「庭」の場面

が乗っていた舟が桑だったので、桑の葉を与えると虫はすくすくと成長し繭になりました。権の太夫はその後、繭から糸を取る方法と布を織る方法を教わり、大いに栄えました。これが我が国の養蚕の始まりとされています。(新井清『かながわの養蚕信仰』を参照)

以上が金色姫の物語です。この話にありますように金色姫は馬鳴菩薩の化身とされ、蚕影山祠堂でも「馬鳴大菩薩本地像」(図版7)と「蚕影山大権現立像」(図版8)という2体が合祀されていました。

【蚕影山祠堂のまつり】

かつて蚕影山祠堂では、毎年3月23日を祭礼の日として祭りを行っていました。当日は朝から祠堂に当番(順に2人づつ)が幟を立て、そこに別の灯籠を取り付けました。それと一緒に正月に張った注連縄を新しいものに張りかえ、さらに養蚕講中の各家から持ってきた繭を糸で縛ったものを祠堂の格子戸へ吊しました(図版2)。そして養蚕講中の人々がここに集まり、お祭りを行いました。



図版7 馬鳴大菩薩本地像



図版8 金色姫立像

【郷土の歴史・伝統を残す努力を……】

以上日本民家園で行った「蚕影山祠堂のまつり」の復元展示から、現在ではほとんど忘れられてしまった川崎の養蚕信仰として蚕影山祠堂について紹介してみました。前述しましたように、現在川崎ではほとんど養蚕は見られなくなってしまい、かつて養蚕を行っていた方々もだんだん少なくなってきました。それと共に、私たちの祖先が様々な困難を乗り越えてきた養蚕の伝統・信仰も消えていこうとしています。そんな中、今回の展示が郷土の歴史や伝統を知り、先人達の暮らしに思いを馳せる機会になってもらえたのではないかと期待しています。「壊し捨て去ることは簡単であるが、残し守っていくことは非常に困難である」とよく言われるように、伝統を守り伝えていくには私たち一人一人の努力が大切です。みなさんがご覧になれる日本民家園の25棟の建築物ならびに多くの民俗・歴史資料も、こうした人々の思いと努力によって残され守られて来たのです。

(学芸員：栗田 一生)

.....

【註】

- (1) 岡上の養蚕農家で、蚕影山への信仰を主とした集まりでした。養蚕農家の養蚕技術交換をはじめ、お日待やお祭りを行って精神的な横のつながりがありました。
- (2) 文久3年は、西暦1863年です。

催し物のご案内

回 お茶席の会

4月23日(日)・5月28日(日)
古民家を鑑賞しながらお茶を楽しみます。
10:00～ 佐々木家にて 先着 100名
一服 300円(和菓子付き・入園料別)
協力:たちばな会・橘樹青年部

回 農村歌舞伎公演

5月3日(祝・水)
秋川歌舞伎あきる野座
「絵本太功記十段目尼ヶ崎閑居の場」
出演:秋川歌舞伎保存会
(東京都指定無形民俗文化財)
13:30～15:15
船越の舞台にて(屋外の階段席になります。)
開演1時間前から会場にて受付
定員250人(悪天候の場合は中止になることがあります。)
料金:200円(入園料別)

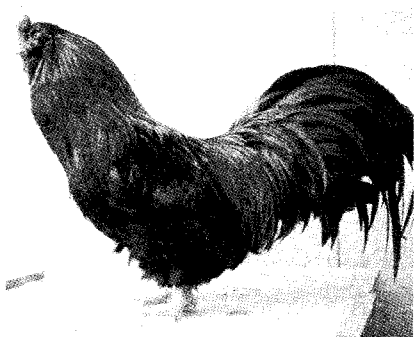


回 昔のはきもの体験コーナー

5月5日(金・祝)
10:00～15:00 作田家 料金:無料(入園料別) 当日参加自由
※天候等で変更になることがあります。
協力:民具製作技術保存会

回 凧づくり教室

5月5日(金・祝)
10:00～15:00 広瀬家 料金:無料(入園料別) 当日先着60名
※雨天の場合は5/6・5/7に順延になります。
協力:民具製作技術保存会



地頭鶏(じどっこ)

回 特別展示会「日本のにわとり」

5月13日(土)・14日(日)
園内の古民家の庭で天然記念物のにわとり17種などの展示をします。
5/9～5/14には本館でも関連の展示をおこないます。
主催 川崎市立日本民家園・社団法人 全日本家禽協会
後援 文化庁・農林水産省・NHK

回 体験学習講座(要申込み・有料)

5月21日(日)わら細工「ぞうり」
5月28日・6月4日・11日(各日)「はたおり」
※くわしくはお問合せください。